

## 「家康公の時計」 四百年を越えた奇跡



著者：落合偉洲

定価：1600円+税

発売日：2013/7/26

単行本：251ページ

ISBN-10：4582468152

ISBN-13：978-4582468151

出版社：平凡社 (2013/7/26)

言語：日本語

徳川家康をまつる静岡市の九能山。請われて赴任した神社の博物館で「家康公の時計」と呼ばれる1581年製の西洋時計と出会った著者。

1609年9月30日、房総の御宿近くの岩和田海岸にスペイン船「サン・フランシスコ号」が難破座礁した。現地の漁民らは乗員373人中317人を救出した。一行はフィリピン臨時総督のドン・ロドリゴ・ピペロが、メキシコに帰国する途中であった。家康は彼らを助け、ピペロを秀忠に面会后、駿府で家康が接見した。その際の通訳は、1600年に遭難し、家康の保護を受けていた三浦按針である。彼に伊東で作らせた帆船で日本商人20人と共に帰国させている。その返礼をもって、2年後スペイン王フェリペ2世からセバスチアン・ビスカイノが派遣され、置き時計が家康に贈呈された。日本は不定時法で、洋式時計は不使用で飾り以外の役割でしかなく、家康の死と共に400年間封印されていた。今となってはこの洋式時計が、一度も修理されることなくよみがえったことが世界に稀有なものとして、著者が国宝にするために苦闘するのがこの本の趣旨である。スペインへの調査、英国時計師の協力を得て、この時計の価値を確認する。文化庁から国宝認定がされなかったため、本書を書くことになったと述べている。家康は、ビスカイノの発言の裏のスペインの植民地化政策を見抜いたため、耶蘇教禁教令を発する。彼らの帰国は支倉常長の「サン・ファン・バウチスタ号(500トン)」と一緒に帰還させることなど、カソリックとプロテスタントの葛藤もあり、この時代の雰囲気伝わって来て多面的に面白い。